



昨年の公演より

公演探しはこれでバッチリ♪

モーツァルトの 名曲を聴こう!!

音楽祭ではモーツァルトの名曲がズラリとラインナップされている。交響曲や協奏曲から歌劇（オペラ）まで、幅広いジャンルのモーツァルト作品が聴ける絶好のチャンス！ 全18曲あるピアノ・ソナタを、すべて演奏するという企画も。ここでは、ジャンル別にモーツァルト曲の魅力をひも解いてみよう。

文＝堀 朋平（音楽学者）



交響曲 Symphony

“交響曲”というジャンルを発展させる

音 楽の王様？ いや、モーツァルト時代の交響曲は、まだオペラや宮廷式典の序奏という、従者のような役回りだった。「シンフォニー」という名称でさえ、初期には揺らぎが見られる。それがしだいに深い内容を帯びるようになり、彼は誰かの依頼なしに自らの意志で筆を進めるようになる。

その究極のかたちが、この音楽祭で演奏される「三大交響曲」。亡くなる3年前の夏につづげざまに書かれた第39、41番は、いわば「柔」「輝」と表現内容はまるで違うのに、作りはよく似た姉妹作。モーツァルトの到達点である。

都市の名がつく作品もある。滞在中に作曲の依頼を受けたためだ。異国の反応を予想しながら「パリ」（第31番）を書き進める生き生きとした姿が、手紙に綴られている。キャリアで初めての長大な意欲作だ。ウィーンから北西に250キロほどの「ブラハ」（第38番）は当時モーツァルトを大歓迎した都市。この作品、最初の2、3分には耳を奪われる。荘厳、光、陰影……まるでオペラのような情景が広がる濃密な序奏は、それまでにないものだった。これ以後、モーツァルトの交響曲は「3楽章」で固定され、表現もぐんと濃くなってゆく。

「ハフナー」（第35番）のように、依頼主の名前で呼ばれる作品もある。市長の息子ジークムント・ハフナーのためにこの作品が書かれた頃は、モーツァルトがウィーンに移り住んでから1年あまり。オペラを成功させるために走り回り、コンスタンツェとの結婚計画も（父に内緒で）進めていた矢先のこと。てんやわんやの24歳——その若々しい祝祭が響く。

そんな祝祭的なモードのなか、ごくたまに、暗く激しいパッションが炸裂する。わずか2曲しかない「短調」の交響曲のひとつ、それが第25番だ。冒頭の「シンコペーション」リズムに注意を向けたい。オペラで「はげしい動揺」を表すためによく使われたものだ。

おすすめ公演

★ 後期の名作を聴く！

- | | | | |
|------|------------|---------------|-------------|
| 第39番 | H23 | 5/4（金・祝）17:10 | 音楽堂邦楽ホール |
| 第40番 | OP | 4/29（日）14:00 | 音楽堂コンサートホール |
| | H14 | 5/3（木・祝）19:30 | 音楽堂邦楽ホール |
| 第41番 | C11 | 5/3（木・祝）10:00 | 音楽堂コンサートホール |

ウラディーミル・アシュケナージ
（指揮） **C11** © Keith Saunders



オーケストラ・アンサンブル金沢
C11

モーツァルト時代のピアノ

モーツァルトの晩年である18世紀後半からベートーヴェン（1770-1827）の時代は、ピアノという楽器がどんどん進化していった時代だった。モーツァルトが慣れ親しみ、弾きこなした鍵盤楽器（ドイツ語でクラヴィーア）は、幼い頃に主流だったチェンバロ、クラヴィコードから、20歳の頃に出会ったフォルテピアノ＝初期のピアノまで。年代別に曲を見ると、それぞれの楽器の音域、音色を活かして作曲しているのがわかる。（文＝編集部）

フォルテピアノが聴ける公演

★ 菊池洋子のフォルテピアノと日本画の融合

A31 5/5（土・祝）11:20 金沢市アートホール



菊池洋子（ピアノ）
© Marco Borggreve

モーツァルトは、当時最も人気のあった楽器製作者ヴァルターのピアノを愛用。写真はモーツァルトの時代より少し後のヴァルター製のピアノ。
写真提供：浜松市楽器博物館



モーツァルトの時代の
クラヴィコード（1788年）
写真提供：浜松市楽器博物館



「アイティストだって、エンターティナーでなくてはならない。」「難しすぎず簡単すぎず……華やかで、聴いていて愉快で……物知りを満足させ、そうでない人もなんだか楽しくなってしまう」もの、それが「協奏曲」なのだ。モーツァルト自身が父宛てに書いている。目標をがむしゃらに追いかける芸術家というのはあまりに近代的なイメージ。奏者や楽器など、そのつどの環境を活かして聴き手を最大限に楽しませる、そのことに自分も大きな喜びを感じる——それがカッコいいアイティストの姿だ。

フルートとハープのための協奏曲には、そんな姿がはつきり見える。パリ到着の早くも翌月に、音楽好きの侯爵父娘のために書かれた。あふれる宮廷の優雅さは、他に類がない。

ヴァイオリン協奏曲第5番には、当時まだ西洋人を身震いさせた恐ろしいトルコ人の行進曲が入っている。このスタイルはモーツァルトお気に入り、ピアノ・ソナタ「トルコ行進曲付き」だけでなく、オペラ『後宮からの誘拐』でも活躍する。

ピアノ協奏曲も奥深い。というか、歴史を広く見渡してみると、このジャンルは誰よりモーツァルトによって飛躍的に地位を上昇させたのである。理由はかんたん。ウィーン移住後、ピアノニストの腕前をいちばん効果的に示せるこのジャンルを開拓することで、青年音楽家はめきめき頭角を現していったからだ。

そんな明るい躍進に、突如まるで真つ青なインクをこぼしたような「短調」の第20番がぎわだっている。そういう闇を経て、最終作（第27番）は曇りなきしらべにいたる。それは、生まれて間もない楽器クラリネットのための協奏曲にも通じている。「最晩年の至純」という言葉がぴったりだ。

協奏曲 Concert 聴衆を惹きつけ 愉しませる名旋律

ペーター・レーゼ（ピアノ） H22



ヴェンツェル・フックス（クラリネット）
C33

おすすめ公演

★ 管楽器の名手による公演を

C12 5/3（木・祝）12:40 音楽堂コンサートホール

C33 5/5（土・祝）15:50 音楽堂コンサートホール

★ 最後のピアノ協奏曲を巨匠が奏でる

H22 5/4（金・祝）14:20 音楽堂邦楽ホール



高木綾子（フルート） C12



室内楽曲 Chamber Music

晩年に渾身の大作を生み出す

「室内楽」というのは、じつはなかなか言葉である。少しだけ音楽史めいた講釈をしておこう。

モーツァルトの生きた時代には、楽器があまり上手でない貴族が楽しむ「ロココ風」の伝統がまだ根強かった（ピアノを伴う室内楽はとくにそう）。いっぽうで、音楽通が集まって本気で「音の対話」を繰り広げるスタイルもあり（弦楽四重奏曲がそう）。モーツァルトの室内楽にはこの2つの前提が共存している。いずれにせよ、プロの奏者たちがおおぜいの前で披露する今日的な伝統は、まだなかった。加えて、「管弦楽」と「室内楽」の差もそれほど明確ではなかった。当時のオーケストラ編成は今日よりずっと小さいから、たとえばモーツァルトのピアノ協奏曲も、じつさいはほとんど「ピアノ付きの室内楽」のような形で演奏されていたのである。

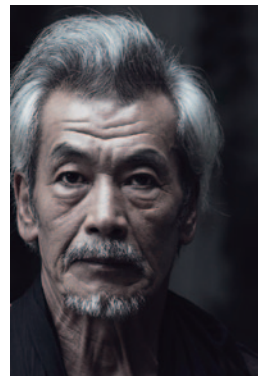
一筋縄ではないジャンルではあるが、この音楽祭で聴くことができる曲の大半は、晩年の大作ばかり。とかくピアノを伴う室内楽には（先に書いたように）ロココ風の気楽さが溢れていることが多いが、モーツァルトのピアノ四重奏曲（全2作）はいずれも円熟期に書かれた友人むけの音楽だ。先輩ハイドンを、なんと「わが親しき友」と呼んで乗り越えようとする弦楽四重奏曲の野心作（第14番「春」、第17番「狩」）には、複雑な技法がたくさん織り込まれている。亡くなる2年前のクラリネット五重奏曲は、誕生後まもないこの楽器の魅力が思うさま引き出された傑作——とくに半音階の騷りは胸をつかむ。

いっぽう、21歳で書かれたフルート四重奏曲や、おなじみ「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」などにはロココ風の優雅さが漂う。力を抜いて楽しみたい。

おすすめ公演

★ カルテットを満喫する

弦楽&ピアノ四重奏曲	H13	5/3 (木・祝) 16:50	音楽堂邦楽ホール
ピアノ四重奏曲	A23	5/4 (金・祝) 17:10	金沢市アートホール
弦楽四重奏曲	A24	5/4 (金・祝) 20:10	金沢市アートホール
弦楽四重奏曲	AK1	4/28 (土) 19:00	北國新聞赤羽ホール
フルート四重奏曲	A32	5/5 (土・祝) 14:30	金沢市アートホール



田中 涙 (ダンサー) H13
© Hayato Araki

木村かをり (ピアノ) A23



ピアノ・ソナタ Piano Sonata

ピアノを熟知した多彩な楽曲

交響曲や協奏曲が、いわば正装でまっすぐ主張を届かせるジャンルだとすれば、ピアノ曲は、その日の気分やプライベートな一コマを伝えてくれる。「ピアノを初見で弾くなんて、僕にとってはウ○コをするようなものです」という22歳の手紙をまともに受け取るかは読者にお任せするが、ともかくソナタの多くは弟子のレッスン用に書かれたもので、作曲にそれほど気合が必要というわけでもなかった。

「ピアノ」（ドイツ語ではクラヴィア）という呼び名は当時、チェンバロにフォルテピアノ、クラヴィコードという3つの鍵盤楽器を指しており、いずれもモーツァルトは愛用した。音量はデリケート。音域は最大でも5オクターヴという、今日の感覚からすると慎ましい楽器を使って、モーツァルトは18のソナタを書いた。

「デュルニッツ・ソナタ」と呼ばれる最初の6作に響く、貴族の華やかな祭典を上げるような音型（第6番など）、母を亡くした年に書かれたイ短調ソナタの比類ない荒々しさ（第9番）、「幻想曲（ファンタジー）」と題されたソナタで自由に羽ばたく意識の流れ（第14番）、そして最後期、ウィーンで学んだバロック音楽の緻密さと、彼ならではの清澄さが同居したしらべ（第17番など）。「ピアノがないと住めませんからね」と、引越した後、真先に楽器を探しにいった作曲家の素顔をたどってみたい。

菊池洋子 (ピアノ)
K12 K32
© Marco Borggreve



おすすめ公演

★ 3日間で全曲制覇

第1夜	K12	5/3 (木・祝) 18:00 ~ 20:30	音楽堂交流ホール
第2夜	K22	5/4 (金・祝) 18:00 ~ 20:30	音楽堂交流ホール
第3夜	K32	5/5 (土・祝) 16:00 ~ 18:30	音楽堂交流ホール

オペラ Opera

最期まで熱心に取り組む



渡邊荀之助(能楽師) H21

親

密なピアノ・ソナタの対局に位置するものの、それがオペラである。うまくいけば桁違いの名声と報酬を得られるオペラは、モーツァルトが12歳にして手がけ、ウィーン移住後も真っ先に、そしていちばん熱心に成功を目指したジャンルだったのだ。当時のイタリア・オペラには、古代のまじめな物語を扱う「セリア」とユーモラスな「ブッファ」の二つがあった。加えて、当時の皇帝ヨーゼフ2世は自国語のドイツ語オペラにも力を入れていた。そういう多彩なキャンパスに向かって、自由に漏れなくモーツァルトは筆を振るった。

『フィガロの結婚』は、お堅い貴族を茶化したが生き生きた市民の日常を描く、ブッファの代表作である。『ドン・ジョヴァンニ』もユーモラスだが、死んだ騎士長が蘇って主人公を地獄に引きずり込むラストには息をのむ。モーツァルトのもっともダークな側面が出たシーンだ。すでに時代遅れとなっていた「セリア」の代表作『皇帝ティートの慈悲』と、光と闇のドラマチックな関係を描いたドイツ語による『魔笛』は、どちらもモーツァルト最晩年の作。(↓関連ページp18~19)

桂 米團治(落語家) H24

おすすめ公演

★ 俳優がアマデウスを演じる

C24 5/4(金・祝) 18:40 音楽堂コンサートホール

★ 能楽師×「皇帝ティートの慈悲」!

H21 5/4(金・祝) 11:30 音楽堂邦楽ホール

★ 落語家×「フィガロの結婚」!

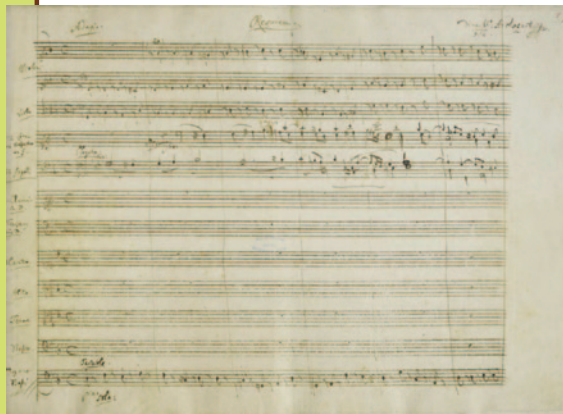
H24 5/4(金・祝) 20:10 音楽堂邦楽ホール



天沼裕子(指揮) C24



「レクイエム」の自筆譜



宗教曲 Religious Music

音

楽家の創作は、置かれた環境に依存する——まあ当たり前のことなのだが、とくに18世紀までの音楽史を考える際、これはとても大事な。宮廷のお抱えだったザルツブルク時代には、じつに全創作の4分の1近くを、ミサを中心とする宗教曲が占めていた。いっぽう、ウィーンで書かれたのは大曲「ハ短調ミサ」と小品「アヴェ・ヴェルム・コルプス」、それに「レクイエム」のみ。当時はマリア・テレジア女帝とその息子ヨーゼフ2世の強い啓蒙主義によって「宗教」が全般的に力を弱めていたため、人々はむしろ自然に湧きあがる祈りの感情を大事にするようになっていた。モーツァルトがウィーンで書いた3作に、個人の内面からの宗教心が色濃く感じられるのには、そんな背景があるのだ。

おすすめ公演

★ 邦楽器で聴く「アヴェ・ヴェルム・コルプス」

A12 5/3(木・祝) 14:10 金沢市アートホール

★ 音楽祭のラストは「レクイエム」で

C34 5/5(土・祝) 19:00 音楽堂コンサートホール

ヘンリク・シェーファー
(指揮) C34



三浦友理枝(ピアノ) K22
© Yuji Hori



モナ・飛鳥(ピアノ) K22
© Marie Staggat